旧尾州家蔵河内本源氏物語の表記について
——東屋巻のミセケチと補入と——

東　辻　保　和
（文理学部国語学国文学研究室）

On manifestation of the Kawachi MSS (in the Bishu Collection) of "Genji Monogatari"

Yasukazu HIGASHITSUJI

はじめに

小稿は，旧尾州家蔵河内本源氏物語（徳川黎明会覆製本に拠る．以下，尾州家本と略称する。）の表記を調査している間に気付いた，特に東屋巻に関する二三の点についての報告である．内容は，必然的に源氏物語諸本の系統の問題にも立入ることゝなるが，小稿は，本格的な系統論を志向するものでないことを，予めお断りしておかねばならない．

（一）

尾州家本東屋巻に見受ける，ミセケチ・補入個処を，「源氏物語大成　校異篇」本文，並びに別本と対校した結果は，以下の表のとおりである．

凡例 (1) **七**（七豪源氏）・**尾**（尾州家本）・**前**（前田家蔵本）・**鳳**（鳳来寺本）・**大**（大島本）・**御**（御物本）・**宮**（高松宮家本）・**陽**（陽明家本）・**保**（保坂本）・**図**（図書寮本）・**池**（池田本）・**国**（国冬本）太字は略称である．(2) 下線の部分は，そこがミセケチになっていることを示す．○印は，そこに補入のあることを示す．(3) 畳字符は，印刷の都合で改めたところが多い．(4) おそろしく→おそろしう・そこはかとない→そこはかとなき等の音便に関する事象は取りあげなかった．(5) 原本文と同筆による補正は取り上げなかった(1)．例えば，次のごときものである．

ものしたま。ねは→ものしたまハねは（1796）　きゝ侍。しかハ→きゝ侍りしかハ（1797）　なに。と→なにかと（1801）　おはしま。めり→おはしますめり（1802）　さひはひ→さいはひ（1803）　かみとより。きて→かみとよりいりきて（1805）　みやすひかにて→みやひかに（1807）　こなたにこなたに→こなたに（1807）　いれしと。ひて→いれしといひて（1808）　見。るしかるへき→見くるしかるへき（1808）　おの。とち→おのかとち（1813）　やかて。なん→やかてまかてなん（1813）　まいりしたりしかは→まいりたりしかは（1817）　なこりなからしと。や→なこりなからしとにや（1818）　いとか。らぬを→いとかからぬを（1831）　もてなしき。えし→もてなしきこえし（1835）　ひきへた。れは→ひきへたてたれは（1847）　しの。かたけなる→しのひかたけなる（1848）　（　）の数字は「源氏物語大成」の頁数である．

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
1793	12	くるしきまても	くるしきまても	くるしきまて河	くるしきまて図　ナシ陽
	13	ありぬへきよを	ありぬへきよを	ありぬへきを河	ありぬへきを御宮保池国　あるへきを陽図
1794	1	をとなひいふいとあまたありけり	をとなひいふいとあまたありけり	をとなひいふあまたありけり尾	をとなひいふあまたあり御保 いとあまたいふあり宮国 いとあまたいふなり陽 あまたいふあり図 いとあまたいふなかに池
	4	人には	人には	人に尾前	人にも御保　ほとにも池
	4	物きたなき人ならす	ものきたなき人ならす	ものきたなきほとにもあらす河	ものきたなからす御保 物きたなきほとにもなく池
	7	あつま方	あつま。かた	あつまのかた河	あつまのかた宮国 はるかなるあつまのかた陽 あつま池
	13	物かたり	ものかたり。	ものかたりあはせ尾前	ものかたりあはせ御保池
		かうしんをし	かうしんをし	かうしんなと尾前	かうしんし宮陽国 かうかみし図　かうし池
	13	みくるしく	みくるしう	みくるしき七尾大風	ナシ御保　みくるしき池
	14	けさうの	けさう。の	けさう人の河	けさう人の御保池
	14	あるへけれ	あるへけれ	おへけれ尾以外不詳	心あるへけれ陽
1795	1	廿二三はかりの程	廿二三のほとはかりのほと	廿二三のはかりのほと尾	二十二三ほと御　廿二三はかり陽　廿二三のほと保図池
	2	ありといふ	あり。といふ	ありなといふ前尾大風	ありなといふ御保池 あると陽　ある図
	6	たつねよらしと	。たつねよらしと	いとたつねよらしと七尾大風	いとたつねよらしと御保 たつねよらし陽
	9	かしつきて	。かしつきて。	思かしつきてん河	おもひかしつきてん御保池 かしつきてん宮陽国 かしつき図
	10	思たち八月はかりとちきりてゝうとを	おもひたちて。ゝうとを	おもひたちて八月はかりとちきりてゝうとを河	思たちて別 八月はかりをちきりわたりて池
	13	よくしも	よくしも	ふかくしも河	ふかくしも御保 ふかうも宮池国　ふかく陽図
1796	2	よろこひ	よろこひ	ナシ七尾大風	ナシ御保池
	4	つゝます	つゝます	とゝめす河	をします御保
1797	3	少将の君に	少将のきみに	少将に河	少将に御保池
	4	きかさりつる	きか。さりつる	きかせさりつる河	きかさりける陽図 しらさりつる池
	13	かやうの	かやうの	さやうの河	さやうの御保池
1798	5	おもひけれは	。おもひけれは	いとをしうおもひけれは河	いとをしとおもひけれは御池 いとをしとおもひたれは保
	9	ものものしく	ものものしく	ものまめやかに七尾大風	ものまめやかに別
	10	すくれたらん女のねかひも	すくれたらん女のねかひも	すくれたる七尾大風 このみも七尾大風	すくれたるをとこのむ御保池 このみも陽　ねかひにも池
	13	人にそしらるとも	。そしらるとも	人にそしらるとも河	人に——人には御保
	14	さもと	さもと	さはた河	
1799	7	せうそこ	。せうそこ	御せうそこ河	御せうそこ御保池
1800	2	きらきらしう	。きらきらしう	かんのとのゝきらきらしう河	かんの殿のきらきらしく御保 たゝかむの殿ゝきらきらしく池 きらきらしく図　ナシ陽
	3	たへ給へる	たへたまへる	たらひたまへる河	たらひ給へる御宮保図 たくひ給つる陽

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
	3	はしめ申し也	はしめまうしゝなり	はしめしことなり河	はしめ申し——はしめし御保池 也——事なり御池
	13	思侍る	おもひ侍る	おもひ侍河	おもひ給ふる宮　思ひはへると図　思ひ給へるを池　おもふ国
1801	6	この	この	かの河	かの御保
		人	人々の	人の河	人の別
1802	13	あへすして	あへすして	いのちたへすして河	いのちたえすして御宮保池国 いのちたえ侍らすして陽
1803	3	めくみ申給なれは	めく見申たまふなれ。	めく見たまふなれは河	めくみ申給也御保池 めくみ給なれは宮国 めくみ申給なれと図
	8	ある	あ。るな	あなる河	あんなる別
	10	心さし	。心さし	かの心さし河	かの心さしは御保 心さしは宮国池図
	10	思はしめ給らんに	おもひはしめ給。らんに	おもひはしめ給へらんに尾前大風	思はしめ給らん——おもひはしめ給へらん御 おもひはしめたまへらん保 おもひはしめたまはん図 ものし給つらん池
	11	ひかひかしく	ひかひかしく	かるかるしく河	かるかるしう御保池
1804	7	あはれや	あはれ。	あはれや河	あはれ御保図池 あはれに宮国
	9	をときゝは	をときゝは	ひときゝは河	人きゝは御保池 をときゝには宮国
	11	めやすきほとの人のかく	めやすきほとの。かく	めやすきほとの人のかく河	人のかく——人の御保 人から池
	14	心のとかに	心のとかに。	心のとかにも尾前風	心のとかにも陽
	14	ゐられたらす	ゐられたらす	ゐたらす尾前大	ゐたらす御陽保　いたられす宮国　いられす図
	14	そそめき	そゝめき	そゝき尾前大	そゝき御宮保図国　ひそめき池
1805	2	御むすめをは	。御むすめをは	みこの御むすめをは河	御むすめ池
	12	かく心うく	。うくこゝろうく	かくこゝろうく河	かく一ナシ宮池国　うく陽保図
	14	あひあひにたる	。あひ思にたる	あさましくあひにたる河	あさましくあひにたる御宮保国 あひにあひたる陽　あさましくあいなき池
		世の人の	よの人の	よと人の河	よの人の御宮保国　よの池
1806	10	はゝ宮なとの御かたに	はゝ宮のなとの御かたに	はゝ宮なとの御かたに河	はゝ宮の御かたなとに図
1807	8	みたてまつれ	見たてまつれと	見たてまつれ尾大風七	
1808	1	人の	。人の	かみ人の河	かみ人の御宮保池
1808	10	その夜もかへす	その夜もかへす	その夜たかへす河	そのよたかへす保　そのよ常陸守取聟少将たかへす（常陸以下割書）御
1809	14	おしまろかして	おしまろかして	おしまろかしつゝ河	をしまろかしつゝ御保池
1810	1	なけいてつ	。なけいてつ	御ともの人にはなけいてつ尾前風	御ともの人にはなけいて御保 なけいつ陽　なけいて給つ図 御ともの人にはなけいたし池
	4	御てい	御。てゐ	御いてゐ河	御いてゐ御宮保図国　いてゐ池
	12	御あつかひ	御あつかひ	御かしつき河	御かしつき御保池
1811	1	しひて	し。ひて	しのひて尾前	しのひて池
	2	こゝには	こゝには	かしこは河	かしこには御保池
	2	いひてけれは	いひてけれは	いひけれは河	
	2	二三日はかり	二三日はかり	二日はかり尾前風	二日はかり御池 二三日はかりは陽 二日保

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
	3	こたみは心のとかに	こたみは心のとかに	こたみそひる心のとかに河	こたみは――このたひそひる御保池　このたひは陽
	3	此みありさまを	◦見る◦	この御ありさま尾大鳳	この御ありさまも御保　ナシ宮陽図国　この御ありさま池
		みる		見ける七尾前大	みける御保池
	4	さくらを	さくらを	はなを河	たゝはなを御保　花を宮池国
		おりたる	ゝりてたる	ゝりたる河	
	13	おもふに	おもふに	おほゆ河	おほゆ御保池　思宮陽国
1812	2	みやたち	宮たち	宮河	みや――みこ御保池
	7	たのみて	たのみて	たにみて尾大鳳	
	9	あらましかたり	あらましかたり	あらましことを河	あらましことを御宮保池 あらましかたりを陽図
	9	おもひつゝけらる	おもひつゝけらる	おもひつゝく河	思ひつゝけふしたり御保池 おもひつゝけゝる陽国 思つゝけらるゝ図
1813	1	すさましきかほ	すさましきかほ	すさましかほ七尾	
	2	かれそ	◦かれそ	わかき人々かれそ河	わかき人々これそ御保 わかき人々かれそ宮国 わか人々かれそ池
	2	なにとも	なにことも	なにとも河	なにかも池
	2	ひたちのかみ	ひ◦ちのかみ	ひたちとの河	ひたちとの御陽保図池 みたちのかみ宮国
	4	かけても	かけて◦	かけても河	かけて図
	5	方より	かたより	御もとより河	ナシ御保　御かたより池
	10	へたつる	へた◦る	へたつる河	へたる池
	11	さまの	◦さまの	御さまの河	御さまの御宮陽保国 御さきのこゑなとも池
	13	わらひ給	わつらひ給	わらひておはす河	わらひておはす御保池
1814	2	山ふところのなか	やまふところのなか	やまふところ尾前大鳳	やまふところ御保池
	2	ありけれ	ありけれ	はへりけれ河	侍けれ御保　おはしましけれ宮国
	11	いさやゝうのものと	いさやか◦うのものと	いさやかやうのことの河	いさやしかやうのものと御保 いさや宮陽図国
	11	人わらはれ	人わらはれ	人わらへ河	人わらへ御保池
1815	4	もてわつらふこと	もてわつらふ◦	もてわつらふこと河	こと――事と御保　ことなと池
	10	御有様は	御ありさまは	御おほえは河	おほえは御保　御さまは宮国 おほく池
	10	たえぬ	たえ◦ぬ	たえこもらぬ河	ゑたへこもらぬ御保池 えたへぬ宮陽図国
1816	2	み給れと	見給◦れと	見給へれと河	みたまふれは図 みたまへれは池
	2	なくさみ	なくさみ	なくさめ尾前大鳳	なくさめ御陽保図　さみ国
	10	らうたけなり	らうたけになり	らうたけなり河	らうたけにそある御宮保図池国 かうたけにそある陽
1817	8	まいり給へる	まいりたまへる	まかてたまへる河	まかて給へる御保　まかて給宮池国　ナシ図
	11	いとけたいして	◦けたいして	いとけたいして河	いと…給へるを　ナシ宮陽図国
1818	1	あらはには	あらはに◦	あらはには河	あらはに宮陽図国
	2	へて	へ◦て	へたて河	へたて宮国
	5	おほかれは	おほかれは	おほかるへし河	おゝかるへし御保池 おほかれと宮国
	7	人かた	ひとかた◦	ひとかたを河	人かたを御宮保図池国

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
	8	うつらむ	◦うつらん	おもひうつらん河	おもひうつらん御保池
	9	本そん	ほんそむ	ほとけも河	ほとけも御保　ほんそんの宮国 本そんも陽　ほとけ池
	11	ほのかにわらひ	ほのかにわつらふひ	ほのかにわらひ尾前大鳳	ほのかにわつらひ保　うちわらひ宮国　かたちひきこえ陽
1819	5	うるさけれは	◦うるさけれは	れいのうるさけれは河	れいのうるさけれは御保池
	12	わたりても	わたりても	へたてても河	へたてゝも御保池
1820	2	みたてまつる	見◦たてまつる	見なれたてまつる河	みなれたてまつる御保　きゝみなれたてまつりたる陽図
	1	まきはしらもしとねも	まきはしらも◦	まきはしらもしとねも河	しとねも——ナシ御保　しとねの陽　御しとねも池
	3	きこゆ	き◦ゆる	きこゆ河	きこゆる陽　たてまつる宮国
	4	なりや	なり◦と	なりや河	なり図
	5	のたまへる	のたまへる	はへめる前尾大鳳	侍める御保池
	9	の給ふ	の給	給河	給御宮保国　かたり給池
1821	2	物おもふたね	もの思◦たね	もの思のたね七尾大鳳	ものおもひのたね別
	10	きこえをきて	きこえをきて	うちなきつゝきこゆ七尾大鳳	うちなきてきこへをく御保 きこえをきていつ宮国 うちなきつゝきこゑをきて池
	11	たちはなれんを	たちはなれ◦んを	たちはなれなんを尾前鳳	たちはなれんことを御保 たちはなれなんを宮池国 たちはなれんも陽
	12	あたりに	◦あたりに	御あたりに河	御あたりに御宮保池国 あたり陽図
	12	しはしも	しはし◦も	しはしにても河	しはしにても御保　しはし池
	13	わか君	わかきみ	わかみや河	わかみや御保図　わか君や宮国 わか宮に陽　わか君の池
	14	くるま	◦車	御車河	御くるま別
1822	2	めとゝめさせ	めとゝめさせ	めとゝめてとはせ河	めとゝめてとはせ御宮保池国
	3	ひたちとのゝ	ひたち殿の	ひたち殿河	
	4	聞も	きく◦も	きくにも河	きくにも御図池　ナシ宮国
	6	すきは	すき◦は	すきなは河	すきなは陽
1823	6	いかてかはとて	いかてかはとて	いかてかとて七尾大鳳	いかゝと池
	7	ねたまへりければ	ねたまへりけれは	ねたまひにけれは河	ね給にけれは池
	12	さしいて	◦さしいて	ほのかにさしいて河	ほのかにさしいて御保池
1824	3	なかむる	なかむる◦	なかむるほと河	なかむるほと御保　なかめたる池
	5	すくし	◦すくし	見すくし河	みすくし御宮保池国
	6	ゐたまひぬ	◦ゐたまひぬ	ついゐたまひぬ河	ついゐ給ぬ御保池　いり給ぬ宮国
	9	しのひ給へれは	しのひ給へ◦は	しのひ給へれは河	給へれは——給つれは池
1825	13	ことゝ	こと◦	ことと河	ことゝ——を宮国　ほと陽図
1826	4	心つきなけに	こゝろつきなけに	こゝろつよけに河	心つよけに御保池
	5	おもへるか	◦おもへるか	わひしとおもへるか河	わひしうおもへるを御保 わひしと思ひたるか池
	14	少将と	◦少将と	右近こ少将と前尾大鳳	右近と少将と池
1827	2	心なき	こゝろなき	さわかしき河	さわかしき御保図　ナシ宮陽国 うれしき池
	11	まいらせ	まいらせ	まいり河	まいり池

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
1828	5	みたてまつりつれは	見たてまつ。れは	見たてまつりつれは	みたてまつれは宮図国
1829	1	たつきなう	。たつきなく	いひもていけはたつきなく河	いひもてゆけはたつきなく御 いひもていけはたつきなく保池
	7	あか君は	あか君は	わか君は尾前	わかきみは御陽保池　あか君宮国
	11	十人はかり	十。人はかり	十よ人はかり河	十よ人はかり御保池
1830	2	かたはらそいたく	かたはらそいたく	かたはらいたく尾	かたはらいたくそ御池 かたわらいたく保
	4	のたまふめりし	。の。たまふめりし	ものしたまふめりし河	の給えりし池
	7	この	この	かの河	
	8	思ふ	。おも。ふ	ものおもはしき河	ものおもはしき御保 思はしき池
	8	なめり	なめり	なり河	（人の御うへ）なり御保 （人のうへ）宮陽図国 （人のうへ）に池
	11	なりにけるにこそ	なりにけるにこそ	なりにけるこそ河	なりにけるこそ御保図 なりぬるこそ池
	11	めやすき	めやすき。	めやすきわさ河	めやすき世宮国　やすきわさ池
	12	おもひはなれなは	おもひはなれ。は	おもひはなれなは河	おもひはなれなは……なにことも——おもひはなれはまことになるとも池
1831	1	ほそやかにて	ほ。そやかに	ほかけいとはなやかに河	ほかけはなやかに御保池 ほそやかに宮図国
	4	右近の君に	右近の。	右近のきみ河	うこんのきみ図
	8	いとおしく	いとをしく	おかしうも七尾大鳳	おかしうも御保　おかしく宮陽図
	14	人	人。	人を尾前大鳳	人を御宮保図国　人とは陽こと池
1832	4	なき	。なき	さらになき河	さらになき御保池
	6	いと	いと	ナシ七尾大鳳	ナシ池
	8	こゑにていふ	こゑにていふ	けはひなり河	けはひなり御保
	8	とりいてさせて	とりいて	とうてさせて河	とりいてゝ宮陽図国
	9	こゝと	こゝ。と	こゝこそと七尾大鳳	こゝこそと御宮保池図　くせと陽図
	14	いふなりしか	いふなりしか	いふめりしか河	いふめりしか御宮陽保国 いふなりし池
	14	いみしき	。いみしき	いといみしき河	いといみしき御保池　ナシ宮国
1833	2	なよゝかに	なよゝかに	なよひかに河	ナシ御保　なよひかに池 なよらかに図　なよらめに国
	3	もてなし	もてなし。	もてなしなと河	もてなしなと御保池
	4	をとりたる	おとりたる。	おとりたるこゝちしける河	をとりたる心ちしける御宮保池国
	6	し給て	し給て	し給つゝ河	し給つゝ御保池
	6	あか月かたに	あかつきかたに	あかつきちかう河	あか月ちかく御保池　あけかたに陽図
	8	いとくちおしう	いとくちをしう	いみしう河	いみしう御保池　いとおしく国
	9	いかなりつらんな	いかなりつらんな	いかなりけんな尾前大	いかなりけんな御保池　いかなりつらん宮国
	10	おほすとも	お。ほすとも	おもほすとも（大成ニナシ）	おほすにも池
	10	右近そ	右近。そ	右近いて河	うこん別
	10	さもあらし	さ。もあらし	さしもあらし河	さしもあらし御保 いてさもあらし宮陽図国 いてされと池

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
1833	12	あひてもあはぬやうなる	あひてもあはぬ。やうなる	あひてもあはぬとやうなる尾前大風	あひてもとやうなる御　あひてもあはぬとやうなる宮国　あひてもあはぬとかやなる陽　あひてもあはぬとかやうなる図　あひてもあはぬと池　あひてもとやうなる保
	13	あらん	あらん	ありけん河	ありけん御保池
	13	ことありかほには	ことありかほに。	ことありかほには七尾前風	
1834	2	さうしみ	さうしみ	うへ河	うへ御保池
	3	あはたゝしく	。あはたゝしく	いとあはたゝしく河	いと心あはたゝしく御保　いとあはたたしう池
	3	夕つかた	ゆふつかた	よさりつかた尾前大風	よさりつかた御保池　ゆふかた図
	4	宮	みや。	みやも河	みやも御保池
	4	心をさなけなる	心おさなけなる	おさなけなる河	おさなけなる御保池、心をさなきけなる陽
	5	やうなる	やうなる	ナシ河	やうの宮国　ナシ保池
	6	をさなさには	おさなけさには	おさなけさにも河	おさなけさにも御保　御おさなさには陽図　おさなさにも池
	8	給へるか	給へる。	給へるか河	給宮国　給たる図　給つるか池
	8	心はつかしけなる	心はつかしけなる	いとはつかしけなる七尾前風	いとはつかしけなる御　いと心はつかしけなる保
	9	えもうちいてきこえす	えもうち。きこえす	えもうちいてきこえす河	うちいてきこえす保　えもうちいてにくゝえす図　えうちいてきこえす池
	10	侍らむも	侍らん。も	侍らん事も河	侍らんことも御保池　侍らん陽
	10	おもたゝしき事になん	おもたゝし。きことになん	おもたゝしくうれしきことになん河	おもたゝしううれしく御保　おもたゝしくうれしきことに池
	11	ふかき	。ふかき	なをふかき河	なをふかき御宮保池国
	12	なん	なん	ナシ河	ナシ御保池
	12	こゝには	こゝ。は	こゝには河	ナシ宮国　こゝは陽　こゝに保池
	13	うしろめたく	うしろめたく。	うしろめたくは尾前大	うしろめたくは御保池　うしろめたなく宮図国
1835	4	なん	なん	ナシ河	ナシ御保
	7	あさましう	あさましう	いと河	ナシ御保池
	9	つくりさしたる	つくりさしたる。	つくりさしたるやうなる河	つくりさしたるやうなる御保池
	12	人けなうたゝ	人けなく。たゝ	人けなくとも河	人けなくとも御保　たゝ宮国　人けなく池
	14	人わらへなるへし	人わらへなるへし	人わらへにいにしへのこととりそへこゝろうかるへし尾大	人わらへにいにしへのことをとりそへ心うかるへし御保　人わらはれになるへし宮国　人わらはれなるへし陽　いにしへのこととりいてゝ心うかるへし池
1836	3	おやはた	おやはた	おやのこゝろには河	おやのこゝちは御保　おやの思はた陽　おやの心には池
	3	おしけれは	おもけれは	かなしとおもへはいかて河	かなしとおもへはいかて御保　かなしとおもへは池
	4	みなさん	。見なさん	やなくさむ河	みなさはや池
	4	思	おもふ。	おもふに河	おもふに御保池　思ふは図
	5	思はれいはれんか	。おもはれいはれんか	いひおもはれんか河	いゝおもはれんか御保池　おもはれいはれん宮国
	6	なまはらたちやすく	なまはらたちやすく	なまはらたちやすに尾前大風	なまはらたちやすき御図　なまはらたちやすに宮保　なまはらたちやすし池　なふはらたちやすに国

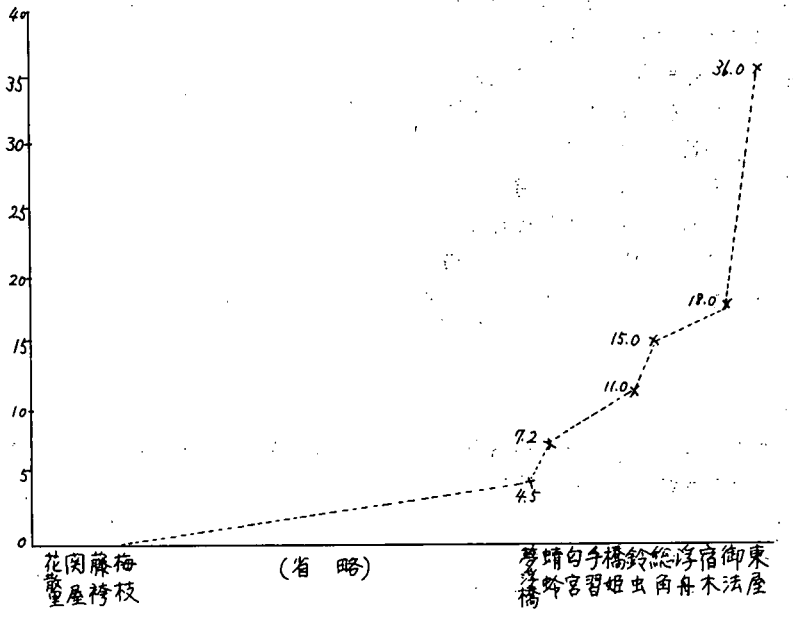
頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
	6	思のまゝにそ	思のまゝにそ	思のまゝなることそ河	おもひのまゝなることそ御保池
	7	かくろへたらむ	かくろへたらん	けへりたらん尾大風	けへりたらん御保　ゝ（カ）くへたゝらん陽　かへりたらん池
	7	あつかふに	あつかふに	あくかすに尾　あくからするに七　あくからすに前　あくからかすに大	あくからすにも御保　あつかふも陽　あつかふにも図　あらするに池
	10	侍も	◦侍も	みすつるも尾前大風	みすつるも御　いつるも宮陽図池国　みするも保
	11	かしこに	かしこに	かみの河	かみの御保池
	11	うちなきて	うちなき◦て	うちなきつゝ河	うちなきつゝ御保
	12	あつかひ	◦あつかひ	かしつき河	かしつき御保
	14	かゝれは	か◦れは	かねて尾前大風	ナシ御保　かゝれは図
	14	みいれす	見◦いれす	見きゝいれす河	みきゝいれす御保　きゝいれす池
1837	3	さま	さま◦	さまも河	さまも御保　さまにも陽　ナシ池
	5	おとる	◦おとる	人におとる河	人におとる御保　わろき池
	6	またかたなりに	◦いとまたかたなりに	またいとかたなりに河	また——またいと御保図池
	14	いてきえは	いてきえは◦	いてきえはた尾前大風	いてきこへはた御　いてきえはた宮保国　きこえは池
1838	8	恋しう面かけにみゆる	こひしうお◦もかけに見ゆる	こひしうおほゆる河	こひしうおもほゆる御保　恋しくおもかけにみゆ宮国　こひしくおもかけにみゆるを陽　おもかけに恋しくおほゆ池
1839	1	なのめならす	◦なのめならす	こよなさまされり尾前大風	こよなさまされり御保　こよなさまさりたり池
	7	心ちも	心地も	心地さへ河	心ちしも御　心も宮国　心ちもさへ保　心ちさへ池
	8	つれつれにて	◦つれつれにて	いとつれつれにて河	いとつれつれにて御保池　つれつれに陽
	8	いやしき	いやしき	あやしき河	あやしき御保池
	9	うちあはれて	うちあはれて◦	うちあはれていとおそろしうあはれなり尾前大風	うちあはれていとものおそろし御　うちあはれていと物をそろしく保池　あはれて図
1840	5	かう	◦かう	けにかう河	けにかう別
1841	13	人々の	人々◦の	人の河	人の御保池
	13	かく	かく◦	かくのみ河	かうのみ御保池
	14	みちに	みちに	みちを河	みちを御保池
1842	8	たてまつらん	たてまつれむ	たてまつらむ河	たてまつれん御保
	11	なとを	なとを◦	なとをも河	なとをも宮池国
		みせさせ	見せさせ	物せさせ河	ものせさせ陽図池
	12	今さらに	いまさら◦に	いまさらなる河	いまさらなる御保
		いかたうめにや	いかたうめ◦にや	いかたうめのかたてにや尾前大風	いかたうめのかたてにや御保　いとかたくめのかたみちにや陽　いかたうめきや図　いかうたうめのかたてにや池
	13	文	ふみ◦	ふみなと河	ふみなと御保池
1843	4	たゝの	◦たゝの	いとたゝの尾前	いとたゝの御保池　たゝ宮国
	7	けらう	けらう◦	けらうの河	けらうの御保
	11	なかめ暮して	なかめくらして	なきくらして河	なきくらして御保池
	11	きつきける	きつき◦ける	きつきにける河	きつきにける御保　きける宮池国　つきにける陽

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
	12	みえぬ	見えぬ	なき河	なき御保池
	12	ひきいれて	◦ひきいれて	こゝろやすくひきいれて河	心やすくひきいれて御保池
	12	まいりきつると	まいりきつる	まいりきたる尾前大風	まいりきたる御保　まいりたる池
	13	おとこ	おとこ	をんな河	をんな御保池　おのこ宮陽図国
	13	わか人	わか◦人	わかき人河	わかき人御保図池
1844	1	あはれに	◦あはれに	あまきみもあはれに河	あまきみもあはれに御保池
	2	世中	世中◦	世中を河	よの事を御　よのなかを保池
	3	かはかり	かはかり◦	かはかりふかう河	かはかりふかう御保　かはかりと宮国　かはり陽
	3	まいり侍らぬを	◦まいり侍らぬを	えまいり侍らぬを尾前大風	えまいり侍らぬを御保池
	4	おもふ給へおこして	おもふたまへおこして	おもひおこして七尾風	おもひをこして御保池
	5	みをききこえてし	見をきゝこえてし	見をきてし七尾大風	みをきてし御保池　みきこえてし宮国　思きこへてし陽
	7	おもへと	おもへと	おもへは河	おもひて御保　思に陽　思給へは図
	7	弁の	弁◦	弁のあま河	弁のあま御保　弁宮陽図国ナシ池
	11	おかしけれは	おかしけれは	おかしけれと河	おかしけれと御保池
	12	心さはきて	心さはき◦て	心さはきして七尾大風	心さはして宮　心さはきして国
	13	月ころの	月ころの	月ころ河	月ころ御宮保池国
1845	3	うひうひしく	◦うゐうゐしく	いとうゐうゐしく河	いとういういしく御池　いとをひをひしう保
	3	ふとしも	ふ◦としも	ふかく河	ふかく御保池　ふと宮陽図国
	4	あやしき	◦あやしき	いとあやしき河	いとあやしき別
	5	ゆるしなくて	◦ゆるしなくて	御ゆるしなくて尾前大風	御ゆるしならて御　御ゆるしなくて保池
	5	ほと	ほと◦	ほとに河	ほとに御宮保池国
	6	殿ゐ人のあやしき	とのゐ人のあやしき	とのゐ人いとあやしき河	殿ゐ人の――とのひ人御保池
	6	やかの	やかの	かの尾前風	やあの陽
	8	みとも人こそ	みとも人こそ	みとも人そ尾風	御ともの人御　みともひとそ保御ともの人そ池
	12	あつま	あつま◦	あつまや七尾大風	あつまや御保池
	13	かた	かた◦	かたも河	かたも御保池
1846	1	ひたのたくみも	ひたのたくみも	ひたのたくみ河	ひたのたくみ御保池
	2	かゝるものゝ	◦ものゝ	かゝるものゝ河	
	3	ねかひも	ねかひ◦も	ねかひなとも河	ねかひなとも御保　ねかゐには図　ねかひなと池
	7	きゝもしらぬ	きゝもしらぬ	きゝしらぬ風	きゝしらぬ御保池
	8	やうなる	やう◦なる	やうにみえてゆく河	やうにみへてゆく御保　やうにてゆく池
	9	心ちも	心地も	心地に河	心ちに池　は御保　に宮国
	11	つまと	◦つまと	このつまと七尾風	このつまと宮陽池国　このとくち御保　このつま図
	11	のせたまひつ	のせ給◦つ	のせ給へは河	のせ給へは御保　給陽　ナシ池
1847	2	忍て	◦しのひて	うちしのひて河	うちしのひて御保池
	12	ひきへたてたれは	ひきへた◦れは	ひきへたてたれは七尾前大	

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
	14	みたてまつりつへかりしか	見たてまつりつへかりしか	見たてまつりぬへかりしか七尾風	みたてまつりぬへかりしか別
1848	1	侍従は	◦侍従は	この侍従は河	このしゝう御保池　しゝう宮陽国　ナシ図
	2	なそ	なそ	なと河	なと宮陽図池国
	3	いやめなるとにくゝ	いやめなるとにくゝ◦	いやめなるとにくゝも河	ゆゝしう御保　いやめならむとにくゝも宮国　いやめなると思にくゝも陽　いやめなるとにくゝも図　いやめなるとゆゝしく池
	3	ものは	ものは	人は河	人は御保池
	3	なみたもろにある	なみたもろにある	なみたもろなる河	なみたもろなる御保池
	4	にくからねと	にくからねと◦	にくからねとも七尾大風	
	7	花の	はな◦の	はななとの尾前大風	はななとの御保　はな陽　はなゝと池
	10	いとゝしほる	いと◦しほる	いととしほる河	いとしほり国
	12	うちかみて	うちかみ◦て	うちかみ給て河	うちかみ給て御保図池　ナシ宮国
	12	いかゝ	◦いかゝ	人やいかゝ河	人やいかゝ御保　人やいかに池
1849	5	おはしつきて	おはしつきて◦	おはしつきてひきいるゝより河	おはしつきてひきいるゝより池　おはしつきてひきいるゝよりものあはれに御保
	5	やとりて	ゝ(や)と◦りて	とまりて河	とまりて御宮陽保池国　かけりて図
	6	おりては	おりては	おりても河	おりても御保　をりて宮国　をり給て池
		すこし心しらひて	すこし心しらひ◦て◦	心しらひ給てすこし河	心しらひ給てすこし御　すこし心しらひ給て陽　心□(空白)給てすこし保
	8	えんなる	◦えんなる	おかしくえんなる河	おかしうゑんなる御　をかしうえんある保池　えならぬ図
		さまに	◦さまに	御さまに河	御けはひに御保池　御さまに陽　御ありさまに図
	10	人々	人々	人尾	ナシ御保池
	11	をんなの	をんな◦の	をんな君の河	をんなきみの御保
		御たい	御たい◦	御たいなと河	御たいなと御保池
	11	より	より◦	よりそ河	よりそ御保池
	12	はれはれし	はれはれし◦	はれはれしう河	はれはれしく御陽保　おもおもしく池
		河の	かはの	やまの尾前大風	やま御保池　水図
		やまの	やまの	かはの尾前大風	かはの御保　にはの宮陽　くさの図　ナシ池　庭国
	13	いふせさ	いふせさ◦	いふせさも河	いふせさも御宮陽保図国　いふせきなと池
	13	なくさみぬる	なくさみぬる	なくさみぬへき河	なくさみぬへき御保池
1850	3	御有さま	御ありさま	御さま七尾大風	御さまは御保　御ありさまに陽　さまは池
	4	はつかしけれと	◦はつかしけれと	いとはつかしけれと河	いとはつかしけれと御保
	5	色々に	いろいろに	いろいろ河	いろいろしう池
		きよくと	よくと	きよらと河	きよらと宮陽国　きよらを図　ナシ池
	5	うちましりてそ	うちましりてそ	うちましりて河	うちましりて別
	6	思いてられて	おもひいてられて	おもひいてらる河	おもひくらへらる御保　思ひいてらるゝ池　思いてゝれて国

頁	行	源氏物語大成校異篇本文	尾州家本校訂前本文	同左校訂本文	別本
1851	4	宮	宮	みこ河	み子御宮陽国　こみや保
	8	あはれは	あはれ。	あはれは河	あはれ陽保図池
	13	ことは	事は。	事はかりは河	事はかりは御保　はかり池
	14	つきなく	つきなく。	つきなくのみ河	つきなくのみ御保池
1852	5	いにしへをは	いにしへをは	いにしへを河	いにしへを御宮陽池
	6	いひつる	いひつる	うちいてつる河	うちいてつる御保池

また，巻毎に，ミセケチ・補入の数を，便宜上，「源氏物語大成」本文の行数で割り百倍したものを，各巻の校訂率とし，その値の小さいものから大きいものへと並べてみたのが次のグラフである(2)．なお，ミセケチ・補入の数えかたについては，上掲の凡例に準ずる．



上のグラフによれば，傾向として，宇治十帖の校訂率が高く，所謂第一部の校訂率の低いことが指摘せられる．就中，東屋巻の校訂率は，他の諸帖に比べて，異状なまでに高いことが判る．この東屋巻のミセケチ・補入の持つ意味については，堀部正二氏(3)，池田亀鑑博士(4)が論ぜられたことがある．即ち，両氏は，尾州家本は，青表紙本系本文を河内本系本文で校訂したものである，とせられた．筆者の調べた限りにおいても，

≪校訂前≫

底本（源氏物語大成校異篇本文）と一致する個所……256（約84％）

底本と不一致の個所……50（約16％）

≪校訂後≫

底本と一致する個所……32（約10％）

底本と不一致の個所……274（約90％）

のとおりである．このようにして，堀部，池田両氏の論ぜられたところを確認し得る．ただ，従来は，専ら青表紙本と河内本との問題として研究せられてきたもののようである．小稿では，視点を

かえて，ミセケチ・補入個所と別本との間に，何らかの関係を見出し得るのではないかと考え，調べてみることとしたのである．

（二）

その手順として，まず，次の六通りのパターン，即ち，

Ⅰ　底本と一致，全別本と一致．
Ⅱ　底本と一致，一部の別本と一致．
Ⅲ　底本と一致，別本と不一致．
Ⅳ　底本と不一致，全別本と一致．
Ⅴ　底本と不一致，一部の別本と一致．
Ⅵ　底本と不一致，別本と不一致．

の六型を仮設し，ミセケチ・補入個所を，一々に，これらのパターンの組合せとして整理することゝした．その結果は，次の表のとおりである．

後＼前	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	計	
Ⅰ						6	6	
Ⅱ					11	14	25	32
Ⅲ						1	1	
Ⅳ			7			2	9	
Ⅴ		181	23		3	7	214	274
Ⅵ	8	34	3		1	5	51	
計	8	215	33		15	35	306	
	256			50				

前＝校訂前の略　後＝校訂後の略

右の表により，校訂前本文（校訂の施された個処についてのみ校訂前の本文をかく称する．以下同）で別本と一致するものは，ⅠⅡⅤを縦に集計して得る238個処（ミセケ・補入総数の約78パーセント）であること，また校訂後において，別本と一致するものは，ⅠⅡⅣⅤを横に集計して得る254個所（約83パーセント）であることを知るのである．これを纏めると次のとおりである．

≪校訂前≫

別本と一致する個処　238（約78％）
別本と不一致の個処　67（約22％）

≪校訂後≫

別本と一致する個処　254（約83％）
別本と不一致の個処　52（約17％）

この結果，校訂前本文からは，背表紙本系本文と深い関係を有する別本群の存在が予想せられるのであり，また，校訂本文からは，河内本系本文と深い関係を有する別本群の存在が予想せられるのである．具体的には，別本群を更に細かく分析してみる必要がある．

まず，校訂前本文と一致する別本群の内訳は，次の如くである．

	御	保	池	宮	陽	国	図
校訂前本文と一致する数	41	45	44	168	179	170	190
率　％	13.4	14.8	14.4	55.1	58.7	55.7	62.3

（注）率は，それぞれ実数を，ミセケチ・補入総数で割って得たものである

この表からは，七別本のうち，校訂前本文との一致率の低い御物本・保坂本・池田本のグループと，一致率の高い高松宮家本・陽明家本・国冬本・図書寮本のグループとに分けられる．また，後者グループの別本同士の組合せは，次の如くであり，宮・陽・国・図の四本の並ぶ場合が最も多い．

宮陽国図	119	宮陽国	11	宮陽図	2	宮国図	21	宮陽	1	宮国	10
宮図	0	宮	2	陽国図	1	陽図	33	陽国	0	陽	12

国図　1　国　3　図　14

ついで，校訂本文と一致した別本群の内訳は，次の如くである．

この表からは，校訂本文との一致率の高い御物本・保坂本・池田本のグループと，一致率の低い高松宮家本・陽明家本・国冬本・図書寮本のグループとに分けられる．更に，前者グループの別本同士の組合せは，次の如くであり，御・保・池の三本の並ぶ場合が最も多い．

	御	保	池	宮	陽	国	図
校訂本文と一致する数	203	199	153	69	50	64	47
率　%	66.6	65.2	50.5	22.6	16.4	21.0	15.4

御保池 121　御保 66　御池 6　保池 4　御 7　保 4　池 21

以上の二つの結果を組合せてみると，そこに，別本群の分布図ができる．かくの如く，校訂前と校訂後とでは，別本の間に，際立った分布上の対立が窺えるのである．即ち，この事象は，高松宮家本・陽明家本・国冬本・図書寮本の四本が青表紙本系本文と深い関係を有することを，また御物本・保坂本・池田本の三本が，河内本系本文と深い関係を有することを示すものと推測せられる．

（三）

さて，更に次の二点について検討しておかねばならない．

第一には，校訂前本文に，量的には，ミセケチ・補入総数の16パーセントに過ぎないのであるが，底本とした「源氏物語大成」本文と一致しないもののあることである．即ち，前表のパターンVVIを集計して得る50個処がそれに当るが，その検討が必要である．第二には，原本文（校訂本文を含まないものをかく称する．以下同。）に，明らかに青表紙本系本文とは異なる本文の存在することについて，どう考えるかである．

まず，第一点の50例は，次の如くである．

1795・1　廿二三のほとはかりのほと　他ニ無シ．蓋シ「ほと」ハ衍カ．
1795・10　おもひたちて。ゝうとを　他ニ無シ．
1798・13　。そしらるとも　**御保**「人にはそしらるとも」他本「人にそしらるとも」
1800・3　はしめまうしゝなり　他ニ無シ．「ゝ」衍カ．
1800・12　侍るなれ　青表紙系「侍なれ」．「る」ノ撥音化，無表記か．
1801・6　この人々の　他ニ無シ．
1803・3　めく見申たまふなれ。　**御保池**と類似．
1803・8　あ。るな　他ニ無シ．蓋シ「る」「な」ノ転倒カ．
1804・7　あはれ。　**御保図池**ト一致．
1804・11　めやすきほとの。かく　他ニ無し．
1805・12　。うくこゝろうく　**陽保図**ト一致．
1805・14　。あひ思にたる　他ニ無シ．
1806・10　はゝ宮のなとの　「の」衍か．青表紙系「はゝ宮なとの」
1807・8　見たてまつれと　別本に無シ．
1811・3　。見。る　「此みありさま」ニ当ル本文ヲ欠ク．**宮陽図国**ト一致．
1811・4　さくらをゝりてたる　「ゝりてたる」他本ニ無シ．「ゝりたる」ノ誤記カ．
1813・2　なにことも　他ニ無シ．
1813・10　へた。る　**池**ト一致．

1813・13　わつらひ給　他ニ無シ．「わらひ給」ノ誤記カ．
1814・11　いさやか。うのものと　他ニ無シ．蓋シ，「かやうの」ノ誤脱カ．
1815・4　もてわつらふ。　他本スベテ「もてわつらふこと」
1816・10　らうたけになり　他本「なり」又ハ「にそある」．「に」衍カ．
1817・11　。けたいして　他ニ無シ．
1818・1　あらはに。　**宮陽図国**ト一致．
1818・11　ほのかにわつらふひ　**保**ト類似．
1820・1　まきはしらも。　**御保**ト一致．
1820・3　き。ゆる　「こ」字脱カ．**陽**「きこゆる」
1820・4　なり。と　「と」衍カ．**図**「なり」
1824・9　しのひ給へ。は　他ニ無シ．
1825・13　こと。　他ニ無シ．
1828・5　見たてまつ。れは　**宮図国**ト一致．
1830・12　おもひはなれ。は　**池**ト一致．
1831・1　ほ。そやかに　**宮図国**ト一致．
1831・4　右近の。　他ニ無シ．「右近の君」ノ誤脱カ．
1832・8　とりいて　**宮陽図国**「とりいてゝ」ト類似．
1833・13　ことありかほに。　他ニ無シ．
1834・6　おさなけさには　別本ニ無シ．
1834・8　給へる。　他ニ無シ．
1834・9　えもうち。きこえす　他ニ無シ．「うちいて」ノ誤脱カ．
1834・12　こゝ。は　**陽**ト一致．
1836・14　か。れは　他ニ無シ．蓋し，「かゝれは」ノ誤脱カ．**図**ノ「かくれは」ハ，「かゝれは」の誤記カ．
1837・6　。いとまたかたなりに　「いとまた」別本ニ無シ．
1842・8　たてまつれむ　**御保**ト一致．
1844・7　弁。　**宮陽図国**ト一致．
1846・2　。ものゝ　底本「かゝるものゝ」．別本ニ無シ．
1847・12　ひまへた。れは　他ニ無シ．
1848・10　いと。しほる　「と」字脱カ．**国**「いとしほり」
1850・5　いろいろによくと　「よくと」別本ニ無シ．
1851・8　あはれ。　**陽保図池**ト一致．

以上の諸例を検討したところによれば，校訂前本文の誤字あるいは，脱字かと解釈し得るものが多い．また，底本とは一致せずに別本とは一致する例も多く，且，それらの別本の多くが，上述の青表紙本と深く関係すると思われる高松宮家本・陽明家本・図書寮本・国冬本であることは，注目に値する．これらを勘案すると，底本に一致しない校訂前本文も，やはり，青表紙本系本文の性質を有するものと考えてよかろう．

次に，第二点について述べたい．尾州家本が，部分的に，青表紙本系本文を河内本系本文で校訂したものであることは，小稿でも確認し得たのであるが，原本文に存した，非青表紙本系本文に関しては，堀部正二氏が(5)，尾州家本東屋巻の原本文は混成本文であると断じられただけで，具体的には説明しておられないようである．筆者は，校訂の施されていない部分で，底本に一致しないところ（因に，このところは，河内本系本文とされているもの．）と，別本との間には，いかなる関

係があるかについて調べることゝした．その手順としては，「源氏物語大成」東屋巻冒頭から，便宜上，25ページに亘り，河内本系本文と比校し得る別本の本文を，すべて抜き出すこととした．次に掲げるのが，そのすべてである．（　）の数字は，通し番号である．

1793・7(1)　ことも**河**　宮陽図国ト一致．
1793・12(2)　もてなやまゝし**河**　御宮陽保池ト一致．
1793・13(3)　ありぬへきを**河**　御宮保池国ト一致．
1794・6(4)　ことこのみたる**河**　一致セズ．
1794・11(5)　引ける**河**　「ひきける」別．
1794・12(6)　わか人ともつとひ**河**　御保池ト類似．
1795・5(7)　さたまりて**尾前大鳳**　別ト一致．
1795・5(8)　あてなり**河**　御保図池ト一致．
1795・8(9)　命をも**河**　別ト一致．
1795・10(10)　思たちて**河**　別ト一致．
1795・14(11)　さしいつはかりにて**河**　宮陽図池国ト一致．
1796・6(12)　かの**七尾前**　御宮陽保図国ト一致．
1796・9(13)　きたるを**河**　御陽保図ト一致．
1796・10(14)　人に**河**　宮陽図国ト一致．
1796・11(15)　なめれは**河**　宮池国ト一致．
1796・14(16)　おほししりぬへき**河**　御保ト一致．
1797・1(17)　へかめるも**尾前**　別ト一致セズ．
1797・2(18)　なと**七尾大鳳**　御宮陽国ト一致．
1797・3(19)　なと**七尾大鳳**　宮陽池国ト一致．
1798・5(20)　ついそうあり**尾前大**　宮陽図国ト類似．
1798・7(21)　あたるを**河**　御陽保図池ト一致．
1798・7(22)　かみは**河**　別ト一致．
1798・13(23)　おもはれたらぬをみれは**尾大鳳**　御保ト一致．
1799・4(24)　なんと**七尾前大**　御保ト一致．
1799・5(25)　いひにかはあらむ**河**　池ト一致．
1799・9(26)　御腹**河**　別ト一致．
1799・12(27)　たてまつりて**河**　別ト一致．
1800・3(28)　ひんなかるへき**河**　御宮陽保図国ト一致．
1800・4(29)　おさなきも**河**　御宮陽保図国ト一致．
1800・5(30)　いと**河**　別ト一致．
1800・14(31)　こと**河**　別ト一致セズ．
1801・4(32)　すくし侍つるとしころの**河**　宮保国ト一致．
1801・6(33)　思給へらんことを**河**　図ト一致．
1802・1(34)　ありける**河**　御宮陽保図国ト一致．
1802・3(35)　さためさめるはや**尾鳳**　御宮保ト一致．
1802・8(36)　ゝ(ト)ころところ**尾前鳳**　別ト一致セズ．
1802・12(37)　いたゝきにも**河**　御宮陽保国ト一致．
1803・9(38)　とまりける**七前尾鳳**　御宮保ト一致．
1803・10(39)　ひきたかへたらむや**河**　御保池ト一致．
1805・1(40)　中々**河**　御宮陽図池国ト一致．

1805・2(41)　し給けるか**河**　別ト一致.
1805・3(42)　女こをこそ**河**　御保図池ト一致.
1805・5(43)　給ぬへかなれは**河**　別ト一致.
1805・8(44)　らうたけにをかしけにて**河**　御宮保図国ト一致.
1805・12(45)　いひなるへしや**河**　陽ト一致.
1806・1(46)　うちなきつゝ**河**　宮陽池国ト一致.
1806・2(47)　こと**河**　宮国ト一致.
1808・1(48)　たゝすみきく**尾**　図ト類似.「たゝきみきく」
1808・2(49)　されは**河**　別ト一致セズ.
1809・3(50)　いとあはれとは**七尾大鳳**　別ト一致セズ.
1809・11(51)　御あたりを**尾大鳳**　宮国ト一致.
1810・6(52)　なとの**河**　御宮陽保池国ト一致.
1810・11(53)　はるかなりつれと**河**　別ト一致.
1810・12(54)　御ありさまの**河**　御宮陽保図国ト一致.
1810・14(55)　はかりに**河**　御宮陽保図国ト一致.
1812・1(56)　きよらにあひたり**尾前**　宮陽国ト一致.
1812・2(57)　丁**河**　別ト一致.
1813・3(58)　この御かた**河**　別ト一致.
1813・4(59)　えたる**河**　御宮保図池国ト一致.
1814・5(60)　御かけ**河**　御宮保国ト一致.
1814・6(61)　中々**河**　御陽保国ト一致.
1814・7(62)　「あるを」ナシ**尾大鳳**　別ト一致セズ.
1814・7(63)　たゝこの御事なむ**河**　御保ト一致.
1814・12(64)　こそは**河**　御保池ト一致.
1815・6(65)　侍らん**河**　別ト一致セズ.
1815・7(66)　山に**河**　別ト一致.
1815・8(67)　思ひたえてや侍らましと**河**　宮保池国ト一致.
1815・10(68)　御おほえは**河**　別ト一致セズ
1816・5(69)　いつもいつも**河**　別と一致.
1816・5(70)　おもひたまへ侍れと**尾前大鳳**　御保ト一致.
1817・5(71)　みえす**尾前大鳳**　御保図池ト一致.
1817・5(72)　またれたる**尾前大鳳**　御保池ト一致.
1817・5(73)　をかしけなとも**河**　御保ト一致.

調査の結果は，次の如くである.

A　別本と一致するもの……62
B　別本と一致せぬもの……11　　計73

そこで，Aの内訳は，次の如くである.

御物本　49：保坂本　49：高松宮家本　44：国冬本　42：陽明家本　37：池田本　34：図書寮本　34

この内訳によると，第一には，大まかに，御・保，宮・国，陽・池・図の三群に分けられるであろうが，各群間には，顕著な量的隔りが認められない．第二には，別本と一致しないもの即ち，(4)(17)(31)(36)(49)(50)(62)(65)(68)—類似するもの(6)(20)を除く—の9例について見ると，一つには，その中の6例—(4)(31)(50)(62)(65)(68)—は，尾州家本を含む河内本系の独自異文と言うべきものであるが，尾州家本のみの

独自異文は，(48)唯一例しかなく，しかも，これは，図書寮本に類似本文があり，共に，底本「たゝにみきく」と同形の個処を誤写したのではないかと考えられるところである．

以上の検討の結果は，尾州家本東屋巻の原本文が，混成本文たる河内本の性格を有していることを如実に示していると言えよう．

（四）

尾州家本の原本文と校訂本文との関係を，どのように把握することができるだろうか．ここで，尾州家本の成立事情が問題となるのである．

周知の如く，山岸徳平博士(6)は，尾州家本の奥書を北条実時の自筆と見られ，「尾州家本は，親行の完成した第一次の証本であり，親行が建長七年七月七日に校訂の筆を措いたものの直接写本であった」と説かれた．この説に対して，堀部正二氏(7)は六ケ条の疑問点を挙げ，「尾州家本は，正嘉二年の書写本に非ず且つ決して親行本の直接写本には非ざる所以を考へて，尾州家本自体は，混合写本であり，親行本の直接写本を以て修正したにすぎないものである．」と鋭く追究せられたのである．筆者は，今一つ，疑点を挙げようと思う．それは，句読点の打ちかたについてゞある．

尾州家本が句読点の統一に欠けることは，すでに山岸博士の御指摘のとおりである(8)．ただそれを書写者に帰することが妥当かどうか，いさゝか疑問がある．いま，後に挿入せられた13帖を除けば，桐壺巻から野分巻に至る間，読点は中央，句点は右下に打たれていて混乱はない．しかるに，藤袴巻から夢浮橋巻までは，この区別が全く見られない．すべて，中央に打たれているのである．

光行・親行父子が力を句読に注いだことは，人の知るところである．もし，山岸博士の言われたごとく，親行の証本を忠実に写し，且つ実時が奥書を自署して権威づけをなしたものが尾州家本であるとすれば，親行所持の証本が，句読点の打ちかたにおいては，未だ十分には整えられていなかったと考えざるを得ないであろう．書写者による不統一にしては，余りにも截然としすぎている感を拭えない．

さて，尾州家本の原本文が混成本文であることは，上に見たところであるが，校訂部を除いた他の部分は，既に見たごとく，まさしく河内本系の本文である．ただ，原本文が，校訂本文に比べて青表紙本的色彩の濃いものであったことは否めない．とすれば，かかる原本文をも，河内本系の一本と認められはしないであろうか．即ち，もと，河内本系の一本であった尾州家本原本文が，更に他の河内本系の一本によって校訂せられたと仮定することは，いかゞであろうか．

注

① 堀部正二氏の「中古日本文学の研究」所収『旧尾州家蔵河内本源氏物語存疑』によれば，尾州家本各帖に施された修正の文字は，殆ど一貫して後京極風を伝える同一人の筆になるものと思しいと述べておられる．管見によれば，少くとも東屋巻に限って言えば，堀部氏の指摘された筆とは別に，原本文と同筆による修正が認められる．ただし，この方は，概ね，誤字・脱字等の修正に止まっているように窺える．

② 参考までに各巻の校訂率を掲げておく．但し，後に挿入せられた13帖は除く．桐壺0.9：帚木2.4：空蟬0.7：夕顔1.8：若紫1.3：末摘花1.9：紅葉賀2.7：花宴0.7：葵1.1：花散里0：須磨0.8：蓬生0.6：関屋0：絵合1.4：薄雲1.0：朝顔0.4：胡蝶3.6：常夏2.4：野分0.4：藤袴0：梅枝0：藤裏葉1.3：若菜上0.7：若菜下2.8：柏木3.4：鈴虫11.0：夕霧2.8：御法18.0：幻0.7：匂宮7.3：紅梅4.2：竹河2.9：橋姫9.0：椎本3.8：総角15.0：宿木16.0：東屋36.0：浮舟16.0：蜻蛉7.2：手習7.9：夢浮橋4.5

③ 注①と同書．

④ 「源氏物語大成研究資料篇」147ページ以下．

⑤ 注①と同書．

⑥ 「尾州家河内本源氏物語開題」昭10・12　徳川黎明会発行　399ページ

⑦ 注①と同書．堀部氏は六ケ条の一つとして，実時自筆と称せられている奥書並びに花押を，実時の自署と見ることに疑問を挟んでおられる．「本朝続文粋」（内閣文庫本複製に拠る）各巻末の実時自筆の識語や，

また，「群書治要」（金沢文庫本複製に拠る）各巻末の実時自筆の識語などと，尾州家本の奥書とを比較してみるのに，いかにも，堀部氏の説かれる如く，同一人のものとは思われないほどに，その筆勢を異にしている．但し，尾州家本の正嘉二年（A. D. 1259），「本朝続文粋」の文永（A. D. 1264～1275），「群書治要」の建治（A. D. 1275～8）という年齢の隔りもあるので，この点のみでは，断定しがたい．小林芳規先生の御教示によれば，花押が三者共に一致するところから，正嘉二年の奥書も，実時自筆と見てよいであろうと言われる．

⑧　注⑥と同書．176～8ページ

付　小稿を成すに当り，終始，稲賀敬二先生の御指導を仰いだ．感謝申しあげる次第である．なお，小稿の内容は，昭和43年6月16日，広島大学国語国文学会研究発表会において口頭発表したものに基づいている．

（昭和43年9月16日受理）